

本との出会い、赤尾先生との出会い

杉山 亜里紗

乙武洋匡さんと言えば『五体不満足』の著者で、生まれつき手足の無い先天性四肢切断の障害を持って生まれたということはほとんどの人が知っているだろう。『五体不満足』は私も小学生の時に読んだことがあった。また、乙武さんが一時期、小学校教師として教壇に立っていたというのはテレビが何かで耳にしたことがあった。

数ヶ月前に、乙武さんが最近流行しているツイッターをやっていると知った。その頃はちょうど、乙武さん自身の教師生活を元にした小説『だいじょうぶ3組』が発売されて、その宣伝のツイート（ツイッターへの投稿）が多くあった。まず私自身がその小説に興味を持ったのと、教育大学の図書館にあれば多くの人が手に取ってくれるのではないかと思い、図書購入希望として申し込んだ。そして本が購入されて手元に届き読み終えた現在、“すばらしい本との出会い”を表現するにはこちらを対象図書とする方が適当だと判断して、当初提出するつもりであり、しかも行き詰まっていた論文を大急ぎで書き直している次第である。

『だいじょうぶ3組』は著者である乙武さんと同じく、生まれながらにして四肢が無いという障害を持ち、電動車椅子に乗って生活している赤尾慎之介を主人公とする。読んでいて、私も彼のクラスの員として様々なことを教わったように感じたので、以下、彼を「赤尾先生」と表記することにす。赤尾先生は市の独自採用の教師として松浦西小学校へ赴任して、5年3組の担任を持つことになった。学校生活では、彼には介助員として白石優作という小学校からの親友がついている。5年3組では児童のこころの問題や学校行事でのことなど、どこのクラスにも見受けられるような様々な問題が日々絶えない。赤尾先生は白石やクラスの児童、他の教師たちの力を借りてそれらに立ち向かい、最善の解決方法を探し出していくといったストーリーになっている。描かれているのは、5年3組の始業式から終業式までの1年間。クラスの人数は28人で、よく話題に上がるのは、主にクラスで目立つタイプの児童数名。私は大学生になってからまだ小学校高学年と接したことがないのだが、自分が小学生だった頃にもいた、大抵のクラスにいるような想像のしやすい児童たちである。

この話が「小説」である以上、描かれている子どもたちや教師たちは作者の意図通りに動かされたものであり、登場人物や読者の心に響かせる赤尾先生の台詞も推敲して作られたものであろう。実際の教育現場では、こんな風に都合よく物

事が展開するだろうかと読んでいて思うこともあった。しかしこの物語の最大のポイントである、“手足の無い障害者の教師”とは、恐らく乙武さんにしか体験し得なかったことだ。このような、体験を元にした事実にほど近い設定であるからこそ、赤尾先生の言動が納得のできるものであり、少なくとも私にはただの教育の理想論とは感じられなかったのではないかと思う。

物語を読み進めていくと、第一章のタイトルから既に気になる言葉が出てきた。「フツー」である。「普通」ではなく「フツー」。ここで赤尾先生は、校庭の桜の木の下で花見をしながら学級会をしないかと提案した。戸惑う白石に対して、赤尾先生は自分自身がフツーでないのだから、教師生活においてフツーをものさしにするのはやめると言う。この「フツー」は他の章にも登場する。姉がダウン症であることに複雑な思いを持つ女子児童のために行った道徳の授業にて、障害者や外国人などのようなフツーじゃない人は「ヘン」なのかと問う。児童の間では、フツーでなくてもその人はその人でいいといった意見が出る。ここでも「変」がカタカナで表記されている。これらの表記は、もちろん乙武さんの思いを訴えたものであろう。普通を基準とし、普通にとられる人々に疑問の目を向けているということであり、それを行うのは普通の人には難しい。赤尾先生、すなわち乙武さんの立場だからこそできることなのではないだろうか。

この「フツー」への疑問は、日々を普通に生活している普通の大学生と自分では思っている私に、そもそも何をもって普通とみなすのかという視点を与えてくれた。だが、小学校生活のやや遠い記憶や、教育フィールド研究でのそれぞれのクラスの様子を思い起こすと、教育現場において「普通」はどのように扱われるべきなのかを考えるのは難しいと感じる。他人と違うことを恐れて無理に周りに合わせるのは、やはりよくないことと思う。しかし教師の立場になれば、児童生徒にある程度普通な行動を取ってほしいと思うこともあるだろう。「普通」と「調和」との違いも難しいところである。だから私は結論として、赤尾先生の言葉のフツー、フツーでないということよりも、その人はその人でいいという部分こそが重要だと思った。そして、それを児童生徒の一人ひとりに伝えられるようになりたいという新たな目標も見えてきた。

このことに関連して、最終章のタイトルは「みんなちがって、みんないい。」である。もちろんこの章の中には、金子みすずの詩「わたしと小鳥とすずと」が登場する。バレンタイ

ンデーに失恋してしまい、自分には取り柄が無いと落ち込んだクラスのムードメーカー的存在の少年に、彼の個性について気付かせようと赤尾先生が教材として用意したものである。この物語では道徳の時間だが、確か私は国語の時間でこの詩に触れたと記憶している。赤尾先生による詩の解説の中には、今までに気付かなかった発見があった。この詩は「何が」違っていいと伝えたいのか。話の中で児童の1人が言ったように、一人ひとりの良いところだと私も思っていた。しかしこの詩には、わたしや小鳥やすずの「できないこと」が並んでいる。つまり、できないことや苦手なことがそれぞれ違って良いと伝えなかったのである。これは新発見であった。あるいは、習ったけれどすっかり忘れてしまっていたことなのかもしれない。どちらにしろ、先述した目標と合わせて心に留めておきたいことだと思った。

ある作品のメッセージ性を引用している話はこの他にもあり、これは特に気になる場所であった。松浦西小学校の運動会の時期に「今月の歌」として選ばれた、「世界に一つだけの花」である。その歌詞の、ナンバーワンよりオンリーワンを目指そうというメッセージは、実際の教育現場でも多く用いられてきたものであろう。実際に、私が中学生の時の保健だよりのタイトルは「Only One」であった。赤尾先生はこの「オンリーワン」に引っかかりを覚える。それは隣の5年2組の担任の教師も同じであった。その教師の話によると、この歌はこれから能力が伸びるでもない30代辺りの世代の人間を救う歌詞としてびったりだと言う。そしてナンバーワンになれる可能性のある子どもたちに、ナンバーワンになることの否定というのはどうなのか、ということである。またもや、私の知らなかった視点が現れた。続けて、一番になることが重要なのではなく、一番を目指す過程の努力や挫折が重要なのだと語られる。しかし今の教育現場は、子どもを傷つかせないようにチャレンジさせていない。この歌に対しての赤尾先生の答えは、目指すところはオンリーワンだが、オンリーワンになるためにはナンバーワンを目指す時期が必要だというもの。そこで運動会の徒競走で、全レースの一位を3組が独占するという目標を掲げた。しかも達成できたなら、赤尾先生は坊主にするという児童との勝負付きである。結果は、最終レースで目標達成ならず。それでも赤尾先生はみんなの頑張りを認め、児童たちに自身の頭を剃らせるのであった。

別にナンバーワンでなくていい、という気持ちを今の私なら理解できる。特に諦めや卑下の意味を含んでいるわけではなく、ナンバーワンへの興味が薄れてきているためである。しかし、これは既にナンバーワンになれない悔しさ（昔は結

構負けず嫌いな方だったように思う）や、小さなものでも獲得できたナンバーワンを私が経験しているからであろう。そんな経験の無いまま、子どもたちにオンリーワンを目指させるというのは、確かに考えさせられる。

これらのような赤尾先生の考えの他に、この物語は教師の裏側が描かれているので参考になる。たびたび出てくるのは、赤尾先生が先輩教師への相談のために飲みに行くシーン。内容はフィクションだとしても、学校外での先生同士のやりとりが覗ける機会となった。他にも職員室での気の合う先生・合わない先生との対話や、先輩教師からの叱責。今までに感じたことのある先生同士の仲というものも、こんな感じだったのだろうかと思うと少しおかしかった。また、それってどうなんだろう？と思う最近の学校事情も見受けられる。作中で副校長が言っていたのは「クリスマス会」と名のついた会の禁止。学校という公的機関が特定の宗教行事を祝うことに問題があるというわけである。そう言われるとその通りであるが、小学生が宗教についてどの程度の認識を持っているだろうか。私は「クリスマス会」であろうと、ベーシックに「お楽しみ会」であろうと名称は何でも構わないが、このような会は子どもが主体となってやるものであるから、子どもたちが楽しめるなら変にこだわらなくてよいのではないかと思う。

最後に、正直に言うと私が家に帰ってきてからパソコンに向かっている時間は、机に向かっている時間よりも遥かに長い。その時間の大半はインターネットをしている。改めて言うのも違和感があるが、インターネットには膨大な情報が溢れている。更にその信憑性も難しいところであり、しばしばレポート等への利用にははばかれることがあるだろう。しかし今回、私はインターネットで不本意に出会った情報（この場合『だいたいぶ3組』という本の存在）が、現在の自分にとって考えさせられる、有益なものだったという面白い体験をすることができた。このことは、本との出会いであるし、また、赤尾先生という1人の先生との出会いでもあるのではないかと思う。今はまだ、赤尾先生の斬新な意見に流されている部分が少なからずあると自覚している。それを踏まえて、また、せっかくこうして出会った本だからこそ、卒業が近くなった頃にでももう一度読もうと思う。次に読んだ時、今より多くを学んで成長しているであろう自分は、この本から今度は何を、どのように感じ取るのだろうか。

『だいたいぶ3組』 乙武洋匡著、講談社、2010

(すぎやま ありさ・釧路校1年)